

◇東日本大震災から1000日。南三陸を訪問されるネットワーク委員会の皆さんに現地ルポをお願いしました。◇



11月中旬、ネットワーク委員会の委員8名で、宮城県南三陸町を訪問しました。「百聞は一見に如かず」で、直接現地で被災された方々や復興活動に邁進されておられる人たちから体験談と復興活動の現状を伺い、震災遺構を巡り、復興の遅れ・難しさを認識した次第です。11月下旬に解体・撤去予定だった南三陸防災庁舎が、保存の方向で再検討中との報道がありました。「語り部バス」で案内して下さった伊藤さまは、「早いうちに一度被災地に来てください。そして、少しずつ復興していく様子を見てください」と話しておられます。多くの会員の皆さまが、ボランティア・現地訪問・イベント協力・買い物などの活動をされておられますので、今後もできるだけご紹介してまいります。

■ 南三陸「ホテル観洋」女将 阿部 憲子さんへのインタビュー



(阿部憲子さん)

ガソリンが手に入るようになったら、ほかの町に行ってしまうのではないかと思いました。他の方はライフラインの整ったところに避難していただいたほうがよいと思ったのです。

レストランは1か月後に再開しましたが、限定メニューのみで、水の代わりにウーロン茶やジュースを容器ごとお出ししたりしました。その時に「店は流されたけれども商品は届けます」という言葉ももらい、大変嬉しく思いました。

「てん店まっぷ」

以前南三陸で構えていたお店が東日本大震災により被災し、新天地で再び営業を開始したものの、認知度が低いという共通の悩みと、「あの店は今どうなっているのだろう」という声に答えて、女将が作った「点在するお店を転々とまわることができる」マップ(次頁参照)

ホテルを避難所として

東日本大震災で南三陸町は町の中心部の80%が壊滅、町全体の62%が被災しました。ライフラインは長期間にわたって停止し、水道は復活するまで4か月もかかりました。雨水でさえも大事な資源で、川で洗濯をしていたほどです。2か月たって電話とインターネットが使えるようになって、仙台で洗濯ボランティアをやっていただけとところがあり、ワゴン車で各家庭を回って、車でおよそ2時間かかる仙台まで運んだりもしました。水がないのが一緒だったら避難所よりもホテルのほうがまだ環境がいいだろうということで、公の避難所ではありませんが、自前で海水の淡水化システムを作り、1,000名を受け入れました。

人口の流出も深刻で、このままでは人がいなくなり、人口流出がさらに続けば人が戻らなくなります。また町の取引先の廃業が相次ぎ、このままでは大変なことになるという危機感を持ちました。そこで学生のいる家庭と経営者を中心に受け入れました。誤解を受けがちですが、失われた工場や会社を再開して町の雇用を復興することが重要だと考えたのです。

観光業は裾野が広く、復興への役目は大変大きいものがあります。自分たちが頑張ることが地域経済復興に役に立つことを認識しました。そして多くの人が来てくれることはとても有難いことです。

ただ地域の商店でもそれぞれ事情が違います。移転して店を開いても、1日にお客さまが1人も来ないこともあるなど、人口流出で先が見えず、こんなはずではなかったという声が多くありました。ならば点在するお店を紹介するものが何かあればいいのではと思いましたが、問題は山積し、実現するにはいくつもの壁を乗り越えなければなりません。しかし、やれることは取り組んでみようということで、作成したのが、店舗の店と点・転をかけあわせて名前を付けた「てん店まっぷ」です。何人かに相談したら、「知っている商店がどこに移ったかわからない」という声があり、さらには商人仲間どうしてさえもわからないということもありました。悩みを



(てん店まっぷ)

誰に相談してよいかわからず、「声をかけてくれてありがとう」とも言われました。よそから来る人だけではなく、お客さまも仲間も、住民にとっても馴染みの店がどこにあるのかわかるということも発見しました。

「てん店まっぷ」には店の特徴を写した写真を載せていますが、カメラさえも流され、写真を撮れずに絵を送ってくれた店もありました。しかし店によって差があると、思い出して悲しくなってしまうので、スタッフにカメラを持たせて訪問させました。仮設住宅で電話のみの営業とか、同じ被災地でも差があります。お客さまが少ないので、店に行けばお茶を出してくれたり、話をしてくれたりします。商品を買わなくてもスタンプ(注:25年12月31日までにスタンプを集めて景品をもらうことができた)を押してくださいとお願いしたところ、ほとんどが快く応じてくれました。人が店に来ることが活況につながるのです。

「てん店まっぷ」には、店の場所と営業時間が変動すると記載していますが、これは町の復興計画がなかなか進まず、仮設店舗から出てくれと言われたりしていることがあるためです。しかし、地元を守ってきた人たちを何とか支援したい、町が整備されたときに大手資本ばかりの南三陸だったら悲しすぎると思うのです。

ぜひじっくりと町を巡って、暖かさを感じていただきたいと思います。「てん店まっぷ」にはお客さまの感想も載せており、励みになっています。

語り部バス

毎日 8:45 から 1 時間、南三陸ホテル観洋では、震災を風化させないために、スタッフが町をバスで案内する『語り部バス』を運行。

震災を風化させないためには、さまざまな人に関心を持っていただき、現地を知ってもらうことが大事です。団体のお客さまは被災現場を巡る観光バスに、説明を受けるためのガイドに乗ってほしいという要望がありました。震災前から仙台からの送迎バスを運行していますが、個人のお客さまにも知っていただきたいという思いがありました。来館されたお客さまがタクシーを依頼されることが多くあります。手配ミスがあってはいけないので行先をお聞きすると、はっきりとは言い難いようですが、何となく被災現場を回りたいということがわかります。そこで、震災を風化させたくないとの思いから、被災の爪痕が残るうちに見てもらうために、1 時間程度で被災地を巡る「語り部バス」を思い立ちました。運行を開始してから一日も欠かさず、団体のお客さまが多く個人のお客さまが少ない時は1~2 台、個人のお客さまが多い時は6 台で運行しています。ホテルのスタッフ8名と地元の方十数名でガイドを行っています。

「うちは1人亡くなったただけだから」とか、「遺体が見つかったただけまだいい」とか言われる被災者の方がおられますが、それがどれだけの悲しみか、これほどの出来事が簡単に忘れられたりしていいのだろうかと思います。千年に一度の災害であり、世界最大級の災害のとらえ方がされていないのではない



(語り部バス)

だろうか、現地を知らないからではないだろうかと思うのです。しかし、志津川病院、南三陸警察署、戸倉小学校などの震災の遺構は次々と解体されてしまい、「今までは行っただけで語らずして語るものがあったのに、伝わらなくなってしまった」と語り部全員が異口同音に口にします。思いを忘れないために、伝えるために遺構が必要だと思うのです。震災を風化させないためにも「高野会館」(注)もできれば残したいと思っていますが、一民間企業では負担が並大抵なものではありません。

(注): ホテルと同じ経営の結婚式場で、4階建てビルの屋上まで津波に襲われながらも、集っていた高齢者327名全員が助かった。被災した建物は公費で解体できるが、一企業が遺構として残すには大きな負担がかかるため、時機を見て町と協議したいとしている。

戸倉小学校の英知

震災の2日前、3月9日に東北地方を強い地震が襲いました。それまでは3階の屋上に避難することになっていましたが、津波からは逃れられても孤立するのではないかという先生の意見で、校長と先生が避難場所を再検討し、震災前日の10日に近くの高台への避難訓練を行いました。そして東日本大震災時、隣接する保育園児、地域住民も一緒に高台に避難しましたが、小学校の屋上をも飲み込む津波の大きさから、そこからわずか数メートル高い神社に再度避難することになったのです。そこは狭い場所で、みんなで抱き合いながら、卒業式のため練習していた歌を歌いながら寒い一夜を過ごし、全員が無事だったのです。

南三陸町防災庁舎(注)は亡くなった方が多くおられ複雑な問題を抱えています。

負の遺構で悲劇を知ることも大事ですが、戸倉小学校のように、人が守られたところを残すことに反対意見は出にくいのではないのでしょうか。それがあまり議論もされないままに取り壊されてしまったのは残念でなりません。

(注): 町は取り壊す方向。津波の第1波の襲来まで庁舎内には約30人の職員がいたが無事が確認されたのはわずか8人。依然行方が分からない職員の多くが防災担当で、防災無線を使いぎりぎりまで住民に避難を呼び掛けた。

まず現地を見る、知る、話を聞く

何回も津波被害に遭っているところに何で住んでいたんだという人もいますが、地方の人たちにとっては先祖代々守ってきた土地であり、家族がいて、仲間がいて、その土地の良さがあるから住んでいるのです。それに、漁をする人がいるから私たちはおいしい魚が食べられるのです。それを理解し、尊重していただきたいと思います。震災から時間が経ち、今まで何をやっていたんだという話が出るがありますが、被災地の人たちは一生懸命やってきているのです。

ぜひ被災地に来てください。そして現地を見て、現地を知り、話を聞くことで、肌で感じ取っていただきたいと思います。海辺の人たちは危機意識が高く、内陸部に住んでいた人の方が犠牲者が多く出ました。地震や津波は東北だけのことではありません。日本中至る所で起きる可能性があります。

修学旅行客がなかなか戻りません。これは一部のPTAの反対意見に動かされているようで、学校から説得に来てほしいという要望もありますが、とても手が回りません。300名程の子供が宿泊したときのアンケートで、数名は最初は来たくなかったと正直に書いていましたが、しかし全員が被災地の実情を感じ取ってくれました。学びのためにも遺構物が必要であり、それを見て感じ取ることが必要だと思っています。

※東日本大震災の被災地にボランティア等でさまざまな支援の手を差し伸べられた方も、被災地を訪問された方も、まだ一度も訪問されていない方も、ぜひ南三陸のみならず東北へ出かけられて、「現地を見て、知って、話を聞いて」みてはいかがでしょうか



(南三陸町防災庁舎)